2024年9月29日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

おおらかに生きよう

［創世記50章15～26節］

ヨセフの兄弟たちは、父が死んでしまったので、ヨセフがことによると自分たちをまだ恨み、昔ヨセフにしたすべての悪に仕返しをするのではないかと思った。そこで、人を介してヨセフに言った。「お父さんは亡くなる前に、こう言っていました。『お前たちはヨセフにこう言いなさい。確かに、兄たちはお前に悪いことをしたが、どうか兄たちの咎と罪を赦してやってほしい。』お願いです。どうか、あなたの父の神に仕える僕たちの咎を赦してください。」これを聞いて、ヨセフは涙を流した。やがて、兄たち自身もやって来て、ヨセフの前にひれ伏して、「このとおり、私どもはあなたの僕です」と言うと、ヨセフは兄たちに言った。「恐れることはありません。わたしが神に代わることができましょうか。あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです。どうか恐れないでください。このわたしが、あなたたちとあなたたちの子供を養いましょう。」ヨセフはこのように、兄たちを慰め、優しく語りかけた。

ヨセフは父の家族と共にエジプトに住み、百十歳まで生き、エフライムの三代の子孫を見ることができた。マナセの息子マキルの子供たちも生まれると、ヨセフの膝に抱かれた。ヨセフは兄弟たちに言った。「わたしは間もなく死にます。しかし、神は必ずあなたたちを顧みてくださり、この国からアブラハム、イサク、ヤコブに誓われた土地に導き上ってくださいます。」それから、ヨセフはイスラエルの息子たちにこう言って誓わせた。「神は、必ずあなたたちを顧みてくださいます。そのときには、わたしの骨をここから携えて上ってください。」ヨセフはこうして、百十歳で死んだ。人々はエジプトで彼のなきがらに薬を塗り、防腐処置をして、ひつぎに納めた。

[1] 恐れるヨセフの兄たちとヨセフの応答

　9月も第五週の日曜日になり、二か月間読んできました「ヨセフ物語」も今日が最後になります。それはまた「創世記」の最後の部分を読む、ということにもなります。私はこのヨセフ物語というのが、「創世記」に中にあるということにちょっと違和感を感じていた所があるのですが、（所謂歴史書の方が合っているように思っていました）、今回またじっくり読ませて頂いて、やっぱりこれが「創世記」にあるのは相応しいことだなと思いました。そのことについては、またあとでお話したいと思います。

　さて、異国エジプトで宰相にまでなったヨセフですが、元はといえば、まだ少年だった時に10人のお兄さんたちから恨まれ、暴力を振るわれた挙句に、モノのように外国の隊商に売り飛ばされたというのが、今エジプトにいる理由になっています。幸いにも「夢」を解き明かす賜物がエジプトで用いられ、また信頼も得て、王ファラオのすぐ下で一国の行政を司る者にされましたし、この国で結婚もし、二人の子供も与えられていました。そして彼の夢の解き明かしの通り、7年間の豊作の後、周辺国も巻き込む酷い飢饉の時代が7年間やって来ました。そこで、備蓄をしていたエジプトに、何とカナンの地から穀物を求めて、何十年ぶりかでヨセフの兄たちが、エジプトの宰相であるヨセフを訪ねたんです。兄たちだと気づいたヨセフは、遂に身を明かし、兄たちも本当に驚きましたが、ヨセフは「どうかもっと近寄って下さい。…わたしをここに遣わしたのは、あなたたちではなく、神です」と言ったのです。そして兄弟たちと涙ながらに抱き合います。これは本当に、神様のみわざよる感動的な再会の出来事だと思います。（創世記45章）。

　その後、ヨセフの年老いた父であるヤコブ（イスラエル）も、その子や孫たちと共にエジプトにやって来て、王ファラオの許可を得て、エジプトで生活出来るようになったのです。そこでヤコブは尚17年間生き続けました。晩年のヤコブの遺言というものは、子孫への祝福であり、また、自分自身は、アブラハムとサラ、イサクとリベカも眠っているマクベラの洞穴に葬って欲しいというものでした。かくしてヤコブは遂に147才で息を引き取りました。50章1節にはこのように記されています。―「ヨセフは父の顔に伏して泣き、口づけした」。

　さて、この後のヤコブの葬儀ですが、これが大変でした。エジプトの王もヤコブを篤く弔ったといえば聞こえが良いのですが、いかにも大国エジプトの力を見せつけるような盛大な葬儀になったのです。大人数の行列に戦車や騎兵も加わり、しかも７日間続いたと書いてあります。カナン人からするとビックリ仰天なことです。ヨセフも、エジプトの行政の司になっていましたから、そうせざるを得なかったということかもしれませんが、これはどうしても異教的な雰囲気もあることだったと思います。その葬儀が終わって、ヤコブの息子たちはヤコブをマクベラの洞穴に葬りました。そして、今日お読みした箇所になります。15節にこう書いてありますね。―「ヨセフの兄弟たちは、父が死んでしまったので、ヨセフがことによると自分たちをまだ恨み、昔ヨセフにしたすべての悪に仕返しをするのではないかと思った」 。つまり、兄弟のしこりは、まだ癒えていないのですね。この辺りはとてもリアルだと思います。

　そして、この後の会話がこの50章のクライママックスです。お兄さんたちは、「人を介して」とありますから、ヨセフ一番可愛いがっているベニヤミンでしょうか、彼を通して、「お父さんがこう言っていました。確かにあなたの兄は酷いことをあなたにしたが、どうか兄たちの咎と罪を赦してやって欲しいということを」と。多分この言葉は、賭けのような言葉です。というのは、聖書は、父ヤコブがそのようなことを言っていたとは書いていません。兄たちは、あのエジプト風の国威発動的な葬儀を見て、「これは大変だ。もしヨセフが虎視眈々と過去の恨みを晴らそうとするなら、バックにはエジプトがある。殺されてもおかしくない。確かに俺たちは弟ヨセフを捨てて売り飛ばすとんでもないことをしたのだから…。ここはもう亡くなった父を引き合いに出して赦して貰うしか道はない」と思ったのかもしれないと思います。ですからもしこの賭けが失敗して、ヨセフが「嘘をつくな！」と怒ったら、それで終わりになる可能性も大きいのです。

どうなったか。17節に「これを聞いて、ヨセフは涙を流した」と書いてあります。ヨセフの心の中には、兄たちが恐れていた復讐心のようなものはもう存在していないのです。正に兄たちの疑心暗鬼でした。このあとのヨセフの言葉です。19節。「恐れることはありません。わたしが神に代わることができましょうか。あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです。どうか恐れないでください」。

[2] 神様の主権こそが、この歴史を作っている

ここで、良く分かりますね。兄たちは、人や国を見て、またその力・権力を見て怯えているんです。一方、ヨセフは、神様を見ています。以前の「わたしをここに遣わしたのは、あなたたちではなく、神です」という言葉もそうですし、この時の「わたしが神に代わることができましょうか」という言葉に、ヨセフの大きさを感じます。「ヨセフの大きさ」と言いましたが、「ヨセフのおおらかさ」といった方が良いかもしれません。彼は権力を持っていても、そこからも自由にされているのです！だから、自分にこだわらない。自分の過去の辛いことを握り締めることから、ゆるめられているのです。これは、神様の愛を知った時から自分の中に始まる聖霊のお働きだと思います。ヨセフのがんばりや力じゃないと思います。ヨセフは、神様のして下さったことをこう言いました。20節。「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え」て下さいました、と。…これは、言ってみれば世の中の価値観がひっくり返るような言葉ではないでしょうか。故なく自分がこうむった不幸な出来事が幸いなことである筈はありません。しかし、不幸と思える出来事をも、神様は、私たちがこれからの生きて行くことが出来るように練り直し、私たちと共に歩んで下さる、ということではないでしょうか。そうです、考えてみるとあのイエス様の十字架というのは、神様がそんなものを背負う必要は全然ないのに、私たちのために背負って下さったとんでもない痛みであり、苦しみです。しかし、主は、敢えて進んでその十字架を背負って下さったことによって、私たちは 神様に愛されている子とされて、もう一度迎え入れられたのです！丁度、ヨセフが涙を流して兄弟たちを許し、受け入れたように、過去の罪が、大きな神様の愛の中に包まれ、前を向いて生きるようにされるのです。だから、こうべを挙げて下さい、どうか恐れないでください、とヨセフは兄たちに言うことが出来ました。神様の愛は、人をおおらかにしますね。ヨセフは言いました。「わたしが神に代わることができましょうか」。つまり、私は神ではない。そして、私たちの歴史を貫いて神は確かにおられるという、ヨセフの歴史観がここにあるように思いました。

初めに私は、何故創世記に「ヨセフ物語」があるのだろうと思ったと言いましたが、今分かる気が致します。創世記というのは、まず「神が最初を始められた」 そして、「神がこの世界をずっと治めておられる」ということを告げている書物だなと。ヨセフの生涯そのものが、それを証ししていると思いました。―ヨセフは110才でその生涯を閉じたとありますが、彼の最後の言葉はこうです。「わたしはまもなく死にます。しかし、神は必ずあなたがたを顧みてくださいます。そのときには、わたしの骨をここから携え上って下さい」（24、25節）。

人間の生涯は誰も皆、終わりが来ます。ヨセフもそれを受け入れています。しかしもっと大事な事は、この後の世代にも、途切れることなく続くものがあると言っているのです。それは「神は必ずあなたがたを顧みてくださいます」ということです。創世記は、「初めに、神は天地を創造された」で始まり「神は必ずあなたがたを顧みてくださいます」で結ばれると言っても良いと思います。もし歴史が人間の「栄枯盛衰」だけなら、それはドロドロの歴史で終わるでしょう。しかし、それは肉眼で見る一面であり、実体の「影」なのではないでしょうか。実体は、「神」であり、その神様の主権こそがこの世界を治めておられるということだと思います。その神様の御旨、人間の愚かさや罪さえも、私たちを生かすために「善」に変えて下さるその御旨は続くのですね。私たち自身の生涯はやがて骨になります。しかし、それは空しいことではありません。神様の愛は、主イエスの赦しは、永遠に残るのです。この神様の「歴史」を知らされている者は、強いと思います。しなやかになれると思います。私たち、自分の小ささに怯えることなく、おおらかに、本当に神様にこの人生を預けて生きて行きたいと思います。お祈り致します。

神様、この朝の礼拝を感謝致します。「人の心には多くの計画がある。しかし主の御旨のみが実現する」。こんなちっぽけな私たちの人生かもしれませんが、しかし、あなたの「顧み」はいつまでも続くことを知り、感謝致します！あなたの大きな愛の中で、おおらかに、安心して生きることが出来ますように。あなたにこの身を預けます。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。